

Title	Avant-titre(黒沢清・ 誘惑するシネマ)
Sub Title	
Author	藤崎, 康(Fujisaki, Ko) 橋本, 順一(Hashimoto, Junichi)
Publisher	
Publication year	2001
Jtitle	Booklet Vol.8, (2001.) ,p.3-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000008-04394228

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Avant-titre

黒沢清の映画は、デビュー作『神田川淫乱戦争』から最新作『回路』にいたるまで、どれをとっても底抜けに面白い。が、その「面白さ」を言葉でつかまえようとすると、黒沢映画はするりと身をかわして逃げていく。

…たとえば私たちは、黒沢映画は人間ドラマや政治的メッセージを扱っているわけではなく、映画それ自体として、つまり純粹に映画的に面白かったり素晴らしいしたりするのだ、と口にしてみる。しかし、はたしてそうか。『CURE／キュア』には、世紀末の日本を震撼させた「宗教事件」や頻発する少年犯罪が少なからず影を落としているように見えるし、『ニンゲン合格』では家族という共同体の崩壊を、『大いなる幻影』では人間相互の無関心が支配する近未来社会を、それぞれ描きつつ、世界が遠からず行き着くであろう、虚無が充実する一種のニルヴァーナを予感させてやまない。あるいは一切の「主題」やメッセージを拒みつつ、その中に巨大な空白を穿っているように見える『カリスマ』に天皇制の物語を読む、といったことも可能かもしれない。…という具合に、黒沢映画の面白さは、「映画的」という言葉だけでは覆いきれない領域になにやら不吉な気体のように浸透していく。

だが、このように私たちがあらやこれやの主題やメッセージを嗅ぎつけた瞬間に、黒沢映画はまたしても姿をくらます。邪教も教祖も、家族の崩壊も、セックスレスの男女関係も、インターネットも、所詮は私たちに差しだされた疑似餌にすぎず、たちまちのうちに風化する事件や現象を彼方に置き去って、黒沢映画はスクリーン上の永遠の「いま・ここ」として現前する。虚無への供物？

とどのつまり、私たちは黒沢映画という錯綜した迷路のなかを右往左往することにしかならないのだが、厄介なのはこれが黒沢映画の面白さの本質と不可分なことだ。であるとするなら、肝心なのは黒沢映画の発するオーラをひたすら全身に浴びることに尽きよう。黒沢清自身の発言を含む本冊子には、いたるところそのオーラの反映が見てとれるはずである。

藤崎＝橋本